

## 「育てる」仕事の再認識を

—昭和六十年代を迎えて—

津 守 真

ある日のことである。数人の小さい子どもが滑り台で遊びはじめたとき、私は滑りおりてきた子どもを、下で受けとめていた。中には、はじめてひとりで滑った子どももいる。滑りおりたところで、一瞬とまり、やったというような表情で、私を見て笑う。私もその一瞬を受けて、しばらく息をのむ。そうして、腰を床につけていた子どもは、自分で立ち上り、ひとりで階段を上ってゆく。次の子どもは、声を立てて滑りおりたところで、顔を見合せて笑う。かなり長い時間感じられる、子どもと相向うその時は、活動の他の部分から切り離され、その時だけで価値をもつ、落着いた一瞬間であるように思われる。私も、滑り台を継続させようと動くのではなく、滑り下りたその現在を、子どもと一緒に実

感するだけである。そうすると、子どもはまた、自分から階段に向う。

子どもと共有された落着いた静けさは、子どもの中に、小さな、しかし決然とした自発性を生み出し、大人の中に、子どもと共に現在を生きることできた相互性の感覚をよび起す。子どもにとって、このとき、滑り台をして遊んだというよりも、他人との相互性の中で自分が生きた体験が、この一日の原動力であったと思う。

幼児が遊ぶことのできる幼稚園をとすることは、フレーベル以来の幼児教育の主張であり、今世紀初頭の新教育運動の教育改革の原点であり、また、昭和初期より、戦中戦後を通して我が国の幼児教育の先覚者、先輩たちが実現しようと努力してきたことであった。急激に人間生活が変化しつつある現代において、子どもが遊ぶことのできる生活をつくることは、とくに意識してなさねばならない。緊張の課題となった。幼稚園だけの問題ではなく、子どもの生活全体において、子どもらしい遊びが奪われている。ごく小さいときから、親がついていかなければ遊ぶ場所が得られない住宅環境、幼稚園から帰った後まで、計画的活動の過密な子どもの生活、こうした環境の中で、幼稚園の中の子どもの遊びは、特別に重要な意味をもつに至った。

カリキュラムに遊びの名前が列挙されても、整列して並び、遊びはじめたと思うと集められる生活の中で、子どもは本気に遊ぶとは思えない。子どもの生活にゆとりがなければ  
よらう。トきよ自生こもとらひて、そしと等てらむなりが七つ割こよらう、

どもは本当に遊ぶようにならない。遊びの中で育てられるのは、物、他人、世界、人生に対する根本態度である。子どもと大人との間に、落着いた相互性の瞬間がもてる時、そこから、子どもは自信をもって未知の世界に一步を踏み出す。そのとき、大人の期待の中になく、他者としての子どもの世界が開かれてゆく。それと出会って、共同の生活をつくってゆくのが保育である。

新しい年、昭和六十年代を迎える。昭和二十年代、三十年代、四十年代、五十年代と変化してきた幼児教育界を顧りみると、いま、社会のもつ「人間を育てる」機能を自覚する時であると思う。富国強兵の絶対的要請が、敗戦によって破れた昭和二十年代は、渾沌の社会であったが、幼児教育によって日本の礎を築くという気概があった。次いで高度成長の経済優位、科学技術万能の時代を経過した私共は、教育はそのいずれにも従属するのではないことを、その中を生きることによって知り得た。どんな子どもも、希望をもち、生き甲斐をもって一日を過せるようにすること、それが一人の人間の生涯を育てていることである。「育てる」ことは、人目にふれないところで行われる毎日の地味な仕事である。この最も人間的な行為である「育てる」ことの価値を再認識しつつ、実践と研究を進めてゆきたい。

(愛育養護学校)